

自分の病気は治せないかもしれないけれど、 治せる病気なら治してあげたい。

IFC 代表 / 不妊治療コーディネーター 川田ゆかりさん



自分自身が、日本では難病指定となっている遺伝子疾患「網膜色素変性症」の患者であり、現時点においては治療技術が世界中をさがしても存在しないため、将来的な失明は余儀無しとされている。しかし、「目が見えている間は、自分自身をきちんと持っていたいんです」とまっすぐに前を見据え、川田ゆかりさんは話す。

川田さんは、北海道出身。16歳の時、奨学金を得て、留学のために単身渡米。語学学校に通い、コロラドの公立高校に編入。その後、ユニヴァーシティ・オブ・コロラド（コロラド大学）に進み、経営学、コンピュータ情報処理、マーケティングを学び、大学院では経営学修士号（MBA）を取得した。

「英語や留学、外国に興味をもったきっかけはあったのでしょうか？」という質問を投げかけてみた。すると、「私のまわりには子供の頃から本がたくさんありました。父はアメリカ文学の教授で、母は英語塾を経営していたんです。アメリカに関する本や英語の本に囲まれて育った環境が、外国に向かわせたのかもしれませんが」という言葉が自然にかえってきた。

大学卒業後、川田さんは米国ジョンソン・アンド・ジョンソン社において、日本の技術を取り入れたレーザーメスの開発プロジェクトに参加。そこで、子宮内膜症の治療に関する臨床レポート作成のため、産

婦人科医や日米の技術者たちなどと専門的研究の経験を得る。また、救急クリニックの経営、マーケティングのコンサルティングなど、アメリカでのビジネス・キャリアも積んだ。国際的ビジネス・ウーマンの人名辞典等にも、川田さんの名は連ねられている。

日本では困難とされている 医療情報と環境を提供

現在、川田さんは『イントロメッド株式会社インターナショナル・ファースティリティ・センター（IFC）』の社長として、日本では困難とされている治療をアメリカで安心して受けられるよう、医療情報と環境を提供している。

例えばそれは、子供を望みながらもその願いが叶えられないというカップルのために、不妊治療のコーディネートをする事だ。3年前前にホームページをつくり情報を流したところ、日本からの問い合わせが急増した。

「実は私自身も不妊に悩んだ時期があったんです。そしてまた、まわりには不妊で悩んでいる人や日本語で援助を得たい人たちがいたことが、会社設立の動機になったんです。日本ではまだまだ制約の多い卵子提供や代理出産。だが、アメリカでは「日本で選択肢のない状態だったのに、望みが叶いました。という方々の声を聞くのが一番嬉しくて」と、川田さんは笑顔で語る。

コーディネートの主な内容としては、プロ

グラムの相談、医師、臨床心理士、カウンセラー、弁護士、卵子提供者や代理母などの紹介、手配。さらに、治療の立ち会い、説明、通訳などもこなす。希望する方には、空港への出迎えやホテルの手配までもするという。

「日本からの問い合わせが毎日のようにあります。日本とは主に電子メールでのやりとりですが、本当に時間がいくらあっても足りないくらい、コンピュータに向かっていることが多いんです。医療の進歩を信じていますが、今のところ自分の病気は残念ながら治せないかもしれない。でも、私を手助けすることで治せる病気であれば治してあげたいと思います」。

川田さんは、忙しさを楽しむかのように毎日をきちんと生きている。サンフランシスコ在住。



【Information】

IFC

Tel (415)386-6784

E-Mail info@intronia.com

http://www.intronia.com